

## 私と「三田会」

昭和 57 年経済 谷口成伸

気が付けば、私と三田会の係わりは既に随分と長いものになってしまった。卒業した 1982(昭和 57 年)年には、入社直後から塾創立 125 周年記念事業に向けた寄付金の募集の案内で会社の三田会の存在を知った。

その後、やはり本当の意味で三田会の素晴らしさを知ったのは海外駐在がきっかけである。1991 年に最初に赴任したシンガポールでは、支店長が塾員で「シンガポール三田会」の会長だったこともあり、同三田会の催し物の準備等で走り回った記憶がある。クリスマスパーティではあの頃人気があった VHS のビデオデッキが福引で当たるという幸運に恵まれたが、幼稚園児だった子供達の前で「おかま」姿で踊らされて少々気恥ずかしい思いもした。

次に駐在した「ジャカルタ三田会」でもクリスマス会や餅つき大会があり、家族で楽しませて頂いた。しかしながら、両国ともに邦人駐在員の数が非常に多く、三田会でも他社の会員の方々との交流はあったものの、催し物などで顔を合わせる程度で、帰国後はそのまま疎遠になってしまった。

2002 年、卒業 20 年の連合三田会幹事年のため日吉にいたが、そこで「杉並三田会」の幟をみつけたことから当会に入会させて頂いた。それ以降、「ハイキング散策の会」や、「六大学野球応援会」など週末に参加できる分科会に参加したり、2004 年の忘年懇親会の実行委員長を拝命し僭越ながらやらせて頂いたりした。そして 2006 年に分科会「コーラス同好会」を立ち上げ、家内にボランティアで歌の指導をやってもらうことにして、今の「ヴィエント」が誕生した。「ヴィエント」第一回演奏会が終わった直後の 2009 年初頭に、エジプトのカイロ事務所長を命じられ、夫人帯同条件であったことより、「ヴィエント」の指導を家内の旧友に委ねてエジプトに渡ることになった。



東京三田倶楽部でのエジプト三田会日本支部

どうもエジプトには三田会が無いようで、それでは作ってやろうと思って赴任したところ、着任直前の 2008 年年末に「エジプト三田会」が設立されたばかりとのことで、早速入会させて頂いた。カイロは邦人駐在員の数も少なく、またテレビ局や新聞社など数多くのマスコミのカイロ支局があるなど、歴史遺産はもちろんのこと、他都市とは違った面白さが

あった。エジプト三田会には商社やマスコミ、また旅行代理店、自動車・建設・通信・電器メーカー、JETRO や JICA 或いは大使館など、多士済々の方々がおられ、お子様たちも含めて家族のような深い付き合いができた。また、エジプト古代王朝の研究に塾の大学院生や塾生の留学生がいて年齢層も広がった。着任1年が経過したころエジプト三田会設立に奔走された初代会長が帰国することになり、私が2代目会長に就任した。エジプト三田会には「入口あって出口なし」と言われ、一度会員になったら地球のどこにいても会員であり続けるというルールがあり、帰国や他国へ異動した者も在外会員として会員資格が永遠に続くことになる。そのため、帰国した会員で「エジプト三田会日本支部」を作り時々集まっては旧交を温めている。

エジプト三田会の会員に旅行代理店の経営者がおり、その方のおかげで春と秋に観光バスと日本人ガイドをお願いして歴史遺産等の散策の会（オールドカイロ



コプト教会前で

散策、歴史あるモスクやエジプト古代キリスト教であるコプト教会訪問、ピラミッド建設に携わった労働者村の発掘現場など、一般旅行者が行かないようなディープな遺跡などを訪問）を催した。

全て家族参加型で、クリスマス会や歓送迎会もやり、小さなお子様方も若き血を諳んじて歌えるようになったが、そのう

ちの一人が塾の横浜初等部第一期生に見事合格した。そんな中、塾の博士課程の大学院生でマムルーク王朝の研究に来ていた女性と、テレビ朝日駐在員のカップルが誕生。彼らが帰国したあと、私に報告があり、結婚披露宴で馴れ初めなどを話してほしいとのこと。家内と二人で一時帰国してスピーチをさせて頂いた。そのときのウェディングケーキがピラミッドの形、テーブル名がルクソール席・アブシンベル席・カイロ席など全てエジプトにちなんだ名前を使っていたのが印象深かった。



ピラミッド型のウェディングケーキ

来客も多く、塾の中東政治が専門の教授(先日、知的好奇心の会で講演された富田教授)や、塾員の作家、医学部の応援指導部員(歴代2人目とか)や、サハラマラソンに参加した塾生など、我が家に招待してエジプト三田会会員にも集まってもらい懇親を深めることができた。



自宅から見た「アラブの春」政変時の  
混乱（手前はナイル川）

2011年1月末から所謂「アラブの春」が起こり、我々夫婦も含めほとんどの駐在邦人が海外に脱出した。当時カイロ日本人会長を務めていたが、その時の苦労は一言では言い表せないものがある。その後治安情勢が一気に悪化したこともあり、家内を先行帰国させ単身赴任になってしまった。でも、家内はそこ  
かいてか「ヴィエント」に復帰することができた。2013年にマレーシアに向けて離任した際にもモルシ大統領に対する

クーデターが発生。楽しいこともたくさんあったが、厳しい政治情勢の中、エジプト三田会の仲間たちと戦友のような固い絆を結ぶことが出来た。マスコミのカイロ支局の三田会各位はアラブの春の時など、連日のように現場からのTV中継などで、光り輝くような活躍をされていたのが印象的である。

さて、2013年7月、無事にクアラルンプール(KL)に異動し、「KL三田会」に入会させて頂いた。激動のアラブから来たこともあり、楽園のようなマレーシアでの生活である。KL三田会では、年に2回の慶早ゴルフコンペがあり、12月のコンペのあとは慶早合同忘年会が催された。家族も一緒に三田会と稲門会でコンペの結果発表と懇親の場になっている。



KLでのKL三田会

2014年の慶早合同忘年会には杉並三田会「旅を楽しむ会『くつがなる』」の皆さんもちょうどマレーシア訪問中で参加して下さい、ヴィエントのメンバーも多く



KL三田会、稲門会合同忘年会での  
杉並三田会の方々

参加されていたのでステージで歌も披露して交流を深めて頂いた。ちなみに、私が駐在した期間中、慶早ゴルフコンペは全勝だった。また、定期的にKL三田会の懇親会があり、駐在三田会員同志の交流を深めることが出来た。日本に帰国してからも、幹事持ち回りで2か月に一度「KL三田会東京支部」として集まり、KLから帰国した会員の受け皿になっている。

2015年5月に無事に帰国し、私も杉並三田会に復帰させて頂き、「ヴィエント」メンバーとして活動を再開した。海外の地域三田会と日本の地域三田会の最

も顕著な違いは構成員の年齢層と会員としての期間であるが、これはある程度やむを得ない部分があるのかもしれない。海外駐在員は様々な情報交換の場として三田会を活用している側面もあるが、そのおかげで日本には出会えない仲間との巡り合いがあり、駐在員生活をより豊かなものにしてきている。日本に帰国したら、やはり仕事に忙殺される日々が待っており、三田会に参加できる機会も少なくなるため、どうしてもリタイアされた後の方々が会員の主流になってしまうのだと思う。しかしながら、海外でそれぞれの三田会に参加し、塾の同窓というだけで家族のような付き合いがそこにあり、仲間としての信頼感が存在していることを、身をもって体験した者は、日本に戻って来てからも、「三田会」という心地よい言葉の響きに吸い寄せられるものである。そういう私もまさしくその一人である。



東京での KL 三田会東京支部